

三〇 國語に入つた和蘭語

我が國の始めて和蘭に紹介せられたのは西暦一五七六年頃である。其の頃より和蘭は海軍を盛んにし、マゼラン海峡より日本に至らんとしたが、其の多くは暴風のために妨げられ、慶長五年（西紀一六〇〇）其の一隻のみが辛うじて豊後に漂着した。其の後船長等は大阪に赴き、家康に謁して貿易の許可を請うた。西紀一六〇八年東印度商會設立せらるゝや、翌年蘭船二隻、長崎より江戸に來り、蘭國王の親書を將軍に呈して貿易の允許を乞ひ、其の結果同年平戸に商館の設立を見、次いで秀忠は葡、西蘭、英の四國に對し、長崎、平戸の二港に限つて貿易することを許した。其

の後一六一九年に至り、和蘭は英國と聯合して葡西兩國に拮抗したが、間もなく蘭英兩國人の間に不和を生じ、和蘭は澎湖島を占領し臺灣島に據り、大いに其の勢力を伸長し、英國はか通商の利なきを知つて平戸の商館を引拂ひ、葡萄牙も其の勢力昔日の如くならず、蘭船獨り交通貿易の全權を掌握せる觀があつた。寛永の鎖港令出づるに及び、横文は絶対に禁止せられたが、吉宗將軍となるや、いたく天文の學を好み、西洋の學を輸入せんとする念深かつたため、享保五年(西紀一七二〇)終に學術に關する諸書に限り洋書の經讀を許可した。茲に於てか蘭學は鬱然として勃興し、爾後青木文藏、西善三郎、吉雄幸作、本木庄左衛門、前野良澤、桂川甫周、杉田玄白、大槻玄澤、稻村三伯、中野柳圃、箕作阮甫等の蘭學者續出し、蘭語の文法書、辭書の編纂せらるゝもの多く、又醫書の翻譯せられたものもある。當時に於ける蘭學の興隆は實に後世に於ける學術發達の基礎を形成したといふも過言ではないのである。

和蘭語の國語中に侵入して普通に使用せられるものが少くない。今其の重なるものを次に掲げる。

(國語)

(和蘭語)

(國語)

(和蘭語)

アラキ

(荒氣 酒の一種)

arak

オルゴル

(白鴉琴)

orgel

カヘール

(暖爐)

kachel

カミルレ

(植物名)

kamille

カラクンテウ

(唐國鳥)

kalkoen

ギヤマン

(金剛石、硝子) diamant

コツブ

(盃、水飲)

kop

コーヒ

(珈琲)

coffij

ゴロフクリン

(臭結褻)

grofgrein

スタメント

(經絲)

stamnet

ズツス

(織物の一種) doek

スランカスラン

(吸毒石)

slangensteen

セイミ

(舍密)

chimie

ドンタタ

(日曜日)

zondag

パトロ

(火藥包)

patroon

ブリキ

(鐵葉)

bilik

ベンキ

(番瀝青)

pik

ヘンルーダ

(芸香)

wijnruit

ホーゴロー

(鳳五郎鳥)

(stuijs) vogel

マトロス

(水夫)

matroos

マンテル

(外套)

mantel

モミー

(木乃伊)

mummie

ランモット

(土撥鼠)

mormot

ランテルン

(燈)

lantern

ルブル

(呼筒)

roeper

國語及朝鮮語のため 終

大正九年十二月三日 印刷
大正九年十二月十五日 發行

國語及朝鮮語のため

定價金三圓五十錢

著者檢印



著者 小倉進平

京城本町二丁目五十番地

發行者 小島庄次郎

京城太平通二丁目三二八番地

印刷者 福田正治郎

發行所

京城本町二丁目
電話番號二五二七
振替京城二二三三

ウツボヤ書籍店

印刷所ウツボヤ印刷部